


































名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考	
灯火具												
高橋典子												
 ひうちがね 火打金	打撃性の発火用具。火打金の形状をみるとカスガイ型と山型に分けられる。カスガイ型は、コの字型の鉄を木片に打ち込んであり、この木の部分を握って使う。長さは8～12cmほどで、火打箱の中に入っているのはほぼこのタイプである。山型は木部は無く、小穴をあけて紐を通すようになっているものが多くみられる。大きさは5cm前後とやや小ぶりで、携帯に適している。その他、長方形のものもいくつかみられる。関東では、火打金を火打鎌と呼ぶ例がある。また、鑿金とも表記する。	ヒウチガネ					ヒイチガネ、ヒウチガネ	ヒウチガネ	ビーナイキ			
 ひうちいし 火打石	火打金と打ち合わせることで火花を作る石。鑿石とも表記される。江戸時代に商品化された。水晶や瑪瑙、石英など地方によって様々な固い鉱物を用いられてきたが、関東では石英が多かったようである。	ヒウチイシ					ヒイチイシ、ヒウチイシ	ヒウチイシ	ヒウス	【鑿石】かど・かどいし・びーいだし・かち・ひうちかど 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 つけぎ 付木	ヒノキや松・杉などを薄く削り、先端に硫黄を塗ったもの。火種から付木にうつして火を燃やし、これを灯芯や薪にうつした。マッチが普及するまで、長い間用いられてきた。	ツケギ		ツケギ	ツケギ	ツケギ	ツケギ、オウギ	コエマリ、アカシ	チキシ	【附木】いおん・こくば・こっば・じく・つけぎ・つけだき・つけだけ・ふきたて・めいた・ゆあー（ゆあん）・いおーいおーぎ・たちよー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 ひうちばこ 火打箱	火打石・火打金・火口（ほくち）を入れておく箱。火打金は古墳時代の遺跡からも出土例があり、明治時代にマッチが普及するまで非常に長い間使われてきた発火道具である。火打箱の中に燃えやすい火口を入れておき、利き手に火打石を持ち、反対の手に持った火打金に上から打ちつける。火花が火口に落ちると火種ができるので、これを付木に移して炎にする。火種はそのまま火口の中で燃え続けるので、上から蓋でおさえて消火する。	ヒウチバコ					ヒウチバコ、ホクチバコ					
 つけぎばこ 付木箱	付木を入れておく容器。囲炉裏のそばや台所などにおいて、すぐに付木を使えるように備えておいた。木製の箱のほか、竹籠（この場合は付木籠と呼ぶ）もある。	ツケギイレ										
 ひうちぶくろ 火打袋	携帯用の発火具一式。袋などの入れ物のなかに火打石と火打金、火口が入る。携帯用の火打金は小ぶり、通常の火打金とは打撃方法が異なり、利き手に火打金を持ち、もう一方の手で火打石と火口を一緒に持って、打ち合わせる。火打袋には煙草入れや根付けなどとセットになって、意匠を凝らした作りのものも多い。											
 マッチ 燐寸	火を起す道具。小さな軸木の先端に薬品が塗ってあり（頭薬）、擦りつけることで発火する。 【製品】 徳用マッチ、安全マッチ、ブックマッチなど。	マッチ		マッチ	マッチ	マッチ	マッチ、ツケギ	マッチ	マッチ	【マッチ】あてこすり・あめらか・あめらかつけぎ・あめりかつけぎ・あつすり・おらんだ・おらんだつけぎ・おらんだびうち・からちけん・からつけぎ・からつけぎ・からつけん・からよ・こすりびうち・しーび・しきだき・しきだき・すいつけぎ・すーび・すっせんこ・すっだし・すったひ・すっだひ・すっだん・すり・すりせんこ・すりだし・すりっ・すりつけぎ・すりつけ・すりつけぎ・すりつけだけ・すりつけん・すりび・すりび・すりびーち・すりびーつ・すりびうち・すりびすり・すりびーち・すりびーち・すりびーち・すりびーち・すりびん・するせんこ・するび・するびー・するびうち・するぶいち・すんだし・せんこ・だんちけっ・だんつき・だんとうきし・だんつけぎ・ちきだき・ちけっ・ちよーせんつけぎ・ついきだきぐわー・つけぎ・つけだき・つけだけ・つけっ・つりつけぎ・とうきじ・とーじん・とーじんつけぎ・とーじんつけぎ・とーずけん・とーつけぎ・とーつけん・とーつけんぎ・とじんつけぎ・とんどろ・はやいお・はやずけん・はやずり・はやつけ・はやつけぎ・はやつけん・はやって・はやびゆーち・はりつけまっち・ぼす・ぼすべる・ぼすぼる・まつり・らんつけぎ・らんつけっ・だんつけっ・らんぼーつけぎ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）		
 たいまつ 炬火・松明	手に持つ照明具、手火の一種。萱・葎殻・枯草、または竹・松などの割木を束ね、先端に点火して、手に持って照明とするもの。主に戸外で使用する灯りである。	タイマツ	タイマツ				タイマツ	タイマツ	タイマツ、テークエマツ、アカシ	【松明】たい・たび・てーびー・とぶしとぼし・どまー・まつ・まつあかし・まつだい・よんのめ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 たいまつだい 松明台	油分の多い植物（松の根株など）を乾燥させ、細かく割ったものなどを燃やし、灯りとするための台、入れもの。脚のついたものや吊り下げタイプのものなど、形態はさまざま。古くなった鍬や鎌などの農具を利用したものもある。関東地方では、安山岩を削ってくぼみをつけた石鉢が多く、一般に「ひでばち」と呼ばれている。 【種類】 篝火台、松灯蓋（まつとうがい）、松あかし台、ひで鉢、吊りなべ、など。	マツアカンダイ						トボンダイ、カガイザラ		【松の樹脂を焚く燈火】あかし・ひでのあかし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 かがり 篝	鉄製の籠型をした容器に肥松などを入れて燃やし、灯りとする。篝は、屋外の明かりとして用いられる。地面に三脚を立てて使うものや、吊して使うものがある。長良川の鵜飼いや、集魚灯として船に固定して使用するものもある。							カガイ	アマラ			

灯火

※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 あぶらざら 油皿	灯油を盛って灯芯を入れ、火をとます小さな皿。二枚一組のものや台のついたものなどもある。一般に、生活に使うものを「油皿（あぶらざら）」もしくは「火皿（ひざら）」、神仏に捧げるものを「灯明皿（とうみょうざら）」と呼び分けられる。			トウミョウ ザラ				トウミョウ ザラ		【油皿】すずき・とーがい・とーがいざら（とーがい）・ゆき・しじち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 とうしん 灯芯	油を浸して燃やし、灯りとするための芯。古くは土器皿のなかに油と布きれなどの可燃物を入れて点灯していたが、やがて、イグサの籬（すい）が灯芯として用いられるようになった。灯芯はトウシミとも呼ばれ、一定の長さに切りそろえて灯火用として売られたほか、和ロウソクの芯にも使われてきた。			トウシミ	トオスミ	トオスミ	ジン			【燈心】ちり・とーしん・とーすみ・やせおとこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 とうしんおさえ 灯芯押え	油皿のなかで、灯芯が浮いて動かないように押さえておく道具。揺立（かきたて）ともいう。陶製や真鍮製などでさまざまな形のものがある。										
 ひょうそく 乗燭	油皿を改良した灯火具。突起に灯芯を立てるので油が垂れず、油皿よりも多くの灯油が入れられて、灯りが長持ちする。「乗燭」の字は「手で持つあかり」を意味するが、形状はさまざまで、油皿に突起をつけただけのものから、蓋や取っ手のついた急須型、油壺型、水滴型などもあり、特に茶碗型のもは「タンコロ」と呼ばれる。その他にも掛型、ロウソク型、片口型などもある。乗燭は行灯や短檠と一緒に使うが、これだけ単独で用いることもあった。また、乗燭の底に穴が開いているものがあり、燭台でロウソクの代わりに使われることもあった。 【種類】乗燭、タンコロ、陶製短檠など。			ヒョウソク							
 とうだい 灯台	油皿を乗せて室内照明に用いる専用の台。油皿をのせる灯械（とうかい）と、竿、台の部分からできており、その素材や形状には様々なものがある。一般的な灯台の高さは3尺2寸（約97cm）とされ、それよりも高いものを高灯台、低いものを切灯台という。 【種類】結び灯台、切灯台、短檠、高灯台、自在灯台、掛灯台、釣灯台、多灯灯台、くそうず灯台、無尽灯（むじんとう）、菊灯など。					コトボン		コトボン			
 とうろう 灯籠	寺社への献灯や邸宅の灯りなどに多く使用された灯火具で、装飾を兼ねた荘厳な雰囲気を持つ。近世には、民家でも風雅な灯籠が庭先に吊り下げられた。 【種類】台灯籠、置灯籠、吊灯籠、高灯籠（盆灯籠）など。							ツロ		【燈籠】かけあんど・やっと 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 がとう 瓦灯	瓦を焼く土で作った灯火具である。台とそれにかぶせる釣鐘型の覆いからできている。覆いの上部の台に油皿を置いて火を点すが、就寝時は、油皿を中に入れて蓋をかぶせ、側面にあいた細い窓からこぼれる弱い光に調節する。室町時代中期にはすでに使用されていたようで、中世の遺跡からも出土している。関東では、浅草の今戸焼きの瓦灯がよく知られている。 【種類】夜学灯など。										
 あんどん 行灯	油皿の周囲を火袋で覆い、隙間風で灯火が消えないように工夫した照明具。火袋は木枠や鉄枠に和紙を張ったもの。行灯の台座には、行灯皿と油差しを置く。初期の行灯は四角形の箱形で、上部に持ち手があって持ち歩くための灯火具だったが、江戸時代以降は、室内その他に据え置く灯火具として広く用いられるようになり、用途に応じて多種多様な行灯が作られた。 【種類】角行灯、円周行灯（遠州行灯）、丸行灯、あこだ行灯、櫓行灯、金網行灯、書見行灯、有明行灯、枕行灯、船行灯、辻行灯、吊行灯、八間（八方）、掛行灯、軒行灯、看板行灯、地口行灯（提げ行灯）、手行灯、蔵行灯など。	アンドン		アンドン	アンドン	アンド、ア ンドン	アンドン			【行灯】しぼん、【丸行燈】まわしあんどん、【掛行燈・はちけん】かきあんどん・さんとく・つりあんどん・はっぱー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ありあけあんどん 有明行灯	寝室用のあかりとして考案された灯火具。台箱の側面に、満月や三日月の窓がくり抜かれている。就寝時に使うときは、この台箱を火袋にかぶせて、窓からこぼれる小さなあかりを点しておいた。有明行灯の呼び名は、この行灯の明かりがほのかで、明け方の空にうっすらと見える「有明の月」のようであることからきている。										
 はちけん 八間	天井に吊す大型の行灯で、二口カンテラに火を点して使用した。8間（14.6m）の距離を照らすところから、この名前がある。また、四方八方を照らすので八方（はっぽう）とも呼ばれた。風呂屋や大きな店屋、広い台所などで用いられた。										
 あんどんざら 行灯皿	行灯の油皿や油差しの下に敷く皿。灯油や灯心のカスで行灯が汚れるのを防ぐ。また、垂れた灯油を回収する。真鍮製や陶製のものがあり、陶器の行灯皿には山水や花鳥図の描かれたものもある。			アンドン/ シタザラ							
 あぶらさし 油差し	灯油を油皿に注ぎ足すための容器。油差しには陶製のほか真鍮製があり、多くは取っ手と注ぎ口が付いた土瓶形だが、小振りの徳利形のものもある。						アブラサシ	アブラサシ		【油差し】わたし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 きゅうじばこ 給仕箱	行灯や燭台などの灯火具を使用するために必要な道具（油差、灯芯押さえ、はくそ壺、芯切りなど）一式を収める容器。手提げの付いているものや、箱、お盆の上に並べるタイプなどがある。										
 かんてら カンテラ	灯油を入れて灯芯を挿し、火を点す容器。銅や真鍮、ブリキ製のものが多い。石油用と菜種油用があり、石油用は引火しやすいので火口が細長い。灯芯にはボロ布や綿糸を利用した。火口が2つある「二口（ふたくち）カンテラ」や、3つの火口を持つ「三口カンテラ」もある。越後地方では、自然にわき出る石油を「臭水（くそうず）」と称して、早くからあかりの燃料として利用しており、石油用カンテラをマンジヨとも呼ぶ。室内では、臭水灯台にマンジヨを乗せて灯りとした。	カンテラ	カンテラ		カンテラ	コトボシ カンテラ	カンテラ	カンテラ	シジチ	【かんてら】 かんちろ・きはち・ひよそく 以上、【標準語引分類方言辞典】（東條操編）	
 せきゆらんぶ 石油ランプ	油壺と芯、ガラス製のホヤ（火屋）から成る灯火具。芯の長さを調節して光量が変わえられる。明治20年頃から国産化が進み、置き型、吊り下げ型、豆ランプなど使用目的によって様々な日本のランプが作られた。畳の生活に合うよう改良された背の高いランプは、台ランプ、座敷ランプと呼ばれる。また、高さ15cm前後の豆ランプは、風呂場や便所などに小さく点すあかりとして日本で考案されたものである。 【種類】 座敷ランプ（台ランプ）、豆ランプ（紐芯ランプ）、卓上ランプ（置ランプ）、手ランプ、吊ランプ、下向きランプ、壁掛ランプなど。	ランプ	ランプ	マランプ	ランプ	ランプ、ダ イランプ	ランプ	ランプ	ホヤランプ		
 ろうそく 蠟燭	灯芯の回りを蠟で固めた棒状の灯火具。紙縷（こより）・綿糸などを燭芯として円柱状に作り、燭芯の先端に点火する。漆や蠟の実からとった蠟を原料としたものは、和ろうそく、木ろうとも呼ぶ。蠟燭は高価であったため、農山漁村では明治末頃まで、松脂をこねて笹の葉や樹皮で包み、細長く巻いた「松脂ろうそく」も用いられた。 【種類】 百日蠟燭、絵蠟燭、蜜蠟燭、和蠟燭など。	ろうそく				ろうそく	ろうそく	ろうそく	ろうそく		
 しよくだい 燭台	台上に釘や筒穴などを付けて蠟燭を立てられるようにした灯火具。室町時代には使われていたようである。灯台と燭台は本体の形は同じもので、油皿と蠟燭のどちらも使えるようになってきているものも多く見られる。蠟燭は高価であったため、蠟燭立てにひょうそくを立てて使用することもあった。蠟燭を光源とする場合油と違ってこぼれないので、吊り下げる、持ち運ぶ、掛けるといった用途に使える。そのため、蠟燭を用いる灯火具には、手燭、掛燭、打ち燭、提灯、がんだうなど多種多様なものがある。 【種類】 多灯燭台、ホヤ付き燭台、ほんぼり燭台、自在燭台、掛燭、吊燭台、折りたたみ燭台、菊灯（兼用タイプ）など。	シヨクダイ				シヨクダイ イ、ロオソ クカテ	シヨクダイ イ、ロソ クカテ	シヨクダイ イ、ロソ クカテ、ト ボシダイ			
 てしよく 手燭	主に屋内、廊下などで持ち歩くための蠟燭を用いる灯火具。三脚のうちの一本が長い柄になっている形のものや、カップ型、火袋がついた雪洞手燭、蠟燭立てと柄が固定されていない自在手燭などがある。 【種類】 面あかり、自在手燭、ほんぼり手燭など。			テシヨク		アンドン				【手燭】 こぼし・ちよっぽり・てどー・ひかっこー 以上、【標準語引分類方言辞典】（東條操編）	
 うちしよく 打燭	鉄棒の一端がとがっていて、畳や壁に突き立てられるようになっている燭台。キツテとも呼ばれる。出先の仕事場などで、床や梁、長押などに突き刺したり、柱穴に差し込んだりして使用した。										
 ちょうちん 提灯	屋外で持ち歩くための蠟燭用の灯火具。一般に火袋は、細い割竹（ひご）を骨として、これに紙を張り、上下に口と底をつけたもので伸縮自在。使わないときは畳んでコンパクトに収納できる。主として夜間の携帯用、また吊掲用としても用いる。初期の提灯は、籠に紙を張ったような形だったが、後に折り畳み式の提灯（箱提灯）ができた。また、江戸時代中期以降、蠟燭の普及とともにさまざまな用途・機能を持つ提灯が作られた。 【種類】 ぶら提灯、岐阜提灯、籠提灯、箱提灯、弓張提灯、高張提灯、馬上提灯、蔵提灯、襖提灯、小田原提灯、傘提灯、けんざき提灯、ガラス提灯、人力車提灯など。	チヨウチン			チヨウチン	チヨウチン	チヨウチン	ツロ	チョーチン	【提灯】 あんちよ・おっべしあんどん・ひぶくろ・へこ・はいばい（幼児語）・ほんぼり（幼児語）【弓張提灯】 こしはざみ【高張提灯】 まとい【小田原提灯】 ぶらり 以上、【標準語引分類方言辞典】（東條操編）	
 がんだう 籠灯	蠟燭用の灯火具。常に垂直を保てる蠟燭立てがついており、上下、水平などの一方向を自在に照らすことができる。江戸時代には捕り物や夜回り、土蔵内での探し物などに使われた。なお、芝居の小道具として使われていたものには、底の空気穴がないものが多い。「強盗（がんだう）」とも表記される。	ガンドウ						ガンドウ	×		
 しんきりばさみ 芯切鋏	和蠟燭の燃え残った芯を摘み取る道具。和蠟燭では、芯が燃え残って炎が暗くなるため、これを取り除いて明るくする必要がある。										
 はくそつば 火くそ壺	芯切鋏で切り取った蠟燭芯、燃えかすを入れる壺。										

灯火

名 称	説 明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 カーバイトランプ	カーバイト（炭化カルシウム）に水を注いで発生したガスを利用した灯火具。アセチレンランプ、水ランプとも呼ばれる。露店や鉱山、漁業、自転車灯などにも使われた。				カーバイトランプ	ガストウ	カーバイドランプ、ガスランプ	カーバイトランプ			